

台湾作家舞鶴が亡母と臨む異界巡りと外界への再出発

: 「拾骨」に見る台湾の洗骨改葬の習俗とともに

榎原真理子

はじめに

台湾の小説家・舞鶴(ぶかく/WU he、本名陳国城、1951-)による短編小説「拾骨」(1993)は、作者の亡き母親への思いと、自身の10年のひきこもり(舞鶴自身の言葉では「自閉 zibi」)生活が投影された作品である。「拾骨」を含む舞鶴の短編小説を収めた小説集で序を著した王徳威が、舞鶴自身の言葉を引用して述べているところによると、「(拾骨)は母を亡くして19年後に立てた記念碑」¹であるという。

舞鶴は1970年代から作家活動を始めた後、1981年から台北市の淡水にひきこもって筆を折った。1990年代初めになると再び作品を発表し始めた。「拾骨」はその復帰後間もなくの作品となる。作品中、ひきこもりで足腰も軟弱な主人公が言うには、「母さんが死んだのは45歳で、ぼくは19歳だった」。そして、「今、ぼくは41歳だが、母さんの歳はもう数えなくてもいい」。作品が書かれた1993年当時、舞鶴は42歳である。作中の主人公の男と亡母の関係に、やはり舞鶴自身の境遇が見出される。

「拾骨」は、ひきこもりの中年男が亡母の遺骨を墓から取り出して再度埋葬する、洗骨改葬(二次葬ともいう)「拾骨」の計画を立て、やり終えるまでの物語である。ひきこもり中年と、彼が比較的若くして死去した母親を強く思慕する様について、小笠原淳は、舞鶴の母胎と故郷・台湾への欲求を指摘し、主人公の露骨な性表現から、エディプスコンプレックスの母胎回帰の欲求とそこに重なる郷土・台湾への回帰願望の表象を導き出して論じている²。

だが、「拾骨」の読みは、クライマックスの場面の息子の子宮回帰願望、それに重なる原郷回帰の憧憬以外にも、さらに広がりを見出せる。作品は、亡母の改葬を思いついてからやり遂げるまでが全体を貫く単線的な物語ではあるが、そこには「拾骨」を原動力としてひきこもりから脱してゆくという主人公の再出発の物語が並走している。また、その過程で主人公が巡る不条理で滑稽な異界も、作品を支える重要な側面であろう。

本稿では、まず作家の舞鶴像、および「拾骨」のあらすじと主人公が辿る台湾の洗骨改葬の流れを確認する。そして、家にひきこもっていた主人公が、「拾骨」の計画とともに外界へと踏み出してゆく過程と、現実と幻想の間で体験する亡母との交流や異界について考察する。結びとして、改葬をやり遂げて主人公が晴れ晴れとした自己解放に至ることと、作品には舞鶴独特の不条理やユーモアが込められていることを指摘する。

¹ 王徳威《序：原郷人裏的異郷人——重讀舞鶴的《悲傷》》(舞鶴《舞鶴作品集1 悲傷》麥田出版、2001)第8頁

² 小笠原淳「死者と母の郷土表象：舞鶴「拾骨」論」(『野草』90号、2012)

1. 作家舞鶴

舞鶴は、嘉義市（台中市と台南市の間にある地方都市）出身とする資料もあるが、概ね台南を出自とする作家とみなされている。執筆初期の頃は度々ペンネームを変更していた。1970年代から創作を始め、処女作は1974年に『成大青年』（28期）に発表の、儚い恋を描いた「牡丹秋」である。台湾の南北を彷徨う生活をして（具体的な経歴は不詳）、1980年代初めから台湾のベニスこと、台北市の港町・淡水にひきこもって筆を折り、10年余りを過ごした。1991年から再び作品を発表し始めた。代表作に、『餘生』（1999）、『悲傷』（2000）、『乱迷』（2008）などがある。

日本語による舞鶴についての先行研究はほとんどなく、小笠原淳の「死者と母の郷土表象：舞鶴「拾骨」論」は貴重な論考であろう。その分析に基づくと、舞鶴が「舞鶴」というペンネームとなったのはひきこもりを破った1991年の作「逃兵二哥」からで、「舞鶴」作品には「総じて、淡水での自閉体験の影が色濃く映じている」³という。また、1970年代から、モダニズムやジェンダー、「同志 tongzhi」と呼ばれるセクシュアル・マイノリティの文学が台湾で注目を集めてゆく中、舞鶴は性を描くことにやはり貪欲であっても、「依然として物語のテーマを台湾郷土の密な風俗や歴史の不条理に見だし続けて」⁴きた作家である。舞鶴自身、「酷児 kuer」（「クィア」を音訳した中国語）作家が流行るのを批判的にもじり、「鬼児 guier」の造語を作って自任している⁵。

そして、「拾骨」を含む短編小説集『悲傷』の序⁶を書いた王徳威によると、舞鶴は「原郷人の中の異郷人」⁷である。

彼は原郷人である、彼が常に考えていることはこの土地の様々なことだ。そしてまた異郷人でもある、最も慣れ親しんでいる環境にしばしば異化や変化の大きな落とし穴が存在することをよく知っている。（中略）舞鶴は独自の意見を持って世に立ち独行し、荒唐無稽を好みかつ強情だが、われわれにとって頭の痛い人物ではない。だが、彼は明らかに意図的に自分の生活スタイルと文学創作でもって、われわれの堅い信念や惰性を嘲笑い、批判する——そして我々に彼とともに「拾骨」をしろと迫るのだ。⁸

小笠原淳の視点に基づくと、舞鶴の描く文学は、台湾の生活や習俗を描く土着性・地元指

³ 小笠原淳「死者と母の郷土表象：舞鶴「拾骨」論」（前掲）2頁

⁴ 小笠原淳「死者と母の郷土表象：舞鶴「拾骨」論」（前掲）3頁

⁵ 小笠原淳「死者と母の郷土表象：舞鶴「拾骨」論」（前掲）3頁および注7

⁶ 王徳威《序：原郷人裏の異郷人——重讀舞鶴的《悲傷》》（舞鶴《舞鶴作品集1 悲傷》麥田出版、2001）第5頁

⁷ 本稿の「原郷人」、「異郷人」は中国語をそのまま用いた。「原郷人 yuanxiang ren」は定着した訳語がなく、そのまま用いられることが多いようである。「異郷人 yixiang ren」は「異邦人」が適訳と思われるが、「原郷人」と対になっていることに鑑み本稿では「異郷人」を用いた。

⁸ 訳は引用者。以下、引用中の「（中略）」は引用者。

向が貫きながら、今日的な解放された性表現が随所に見られる、「異素材ミックス」とでも言えるものである。一方で、王徳威の述べるように、舞鶴は、現実の奥に広がる不条理な異界を描く奇異な幻想性も同様に際立っている。さらに、舞鶴は本省人で台湾語を用い、かつ独特で難解な文体であることも知られている。総じて、簡潔に形容し難い「鬼児」たる舞鶴像となるのであろう。

2. 短編小説「拾骨」

舞鶴自身の母親との関係が投影された 1993 年の短編小説「拾骨」は、舞鶴の「鬼児」ぶりをふんだんに味わえるものであろう。

「拾骨」は、ひきこもり中年「ぼく」が亡母の遺骨を墓から取り出して再度埋葬する風水の洗骨改葬「拾骨」の計画を立て、やり終えるまでの物語である。

「ぼく」は、自分が 19 歳のときに 45 歳で他界した母親のことを久しぶりに夢に見て、なぜ今母が夢に出てきたのかと気にかかり、墓にある遺骨を改めて寺に納骨する洗骨改葬「拾骨」をやりたいと考え始める。「ぼく」は 41 歳で、過去に妄想性障害を患って療養所に何年か入院していたことがあり、足腰も軟弱で、抗不安薬を飲みながら自宅にいる現在も寝たり起きたりの無為な毎日を過ごしている。小学校教師をしている妻がおり、子供はいないが、ぼんやりとこの先持つであろう赤ん坊のことを考えている。妻は家と庭先だけにひきこもってよたよたしている夫をやや見下げつつも、夫の良き話し相手となり、夫婦生活もうまくいっている。同時に、妻は夫の女癖のことを心配することもある。「ぼく」は、兄弟親類の説得、費用の工面、納骨する壺と寺選びに奔走し、最後、墓を開けて取り出した母の遺骨を納骨堂に無事に安置するまでをやり遂げる。

その過程では、様々な異界や空想の世界を巡り、奇異な生きものに出会って対話したり、亡母の亡霊と出歩いたりする。姿はないが、「ぼく」が心の中で頼る、スピリチュアル系本の著者で「精神の旅行家」の奥子^{アオズ}の助言も度々語られる。

終盤、「ぼく」は墓地で母の遺骨を集め終わると、立ち寄った露店で、傍でかき氷を食べる女子学生の肉体に目を奪われて恍惚とし、母の肉体に思いを馳せる。母の骨のことを考えながら、駅でふくよかな太腿の女につられ電車に乗る。そのまま娼婦を買いに風俗店へ行き、娼婦の生々しい下半身に包まれながら臍の中へと入ろうとする。寺で親族と合流してとうとう骨壺を納骨堂に収め、骨壺の表面にある母親の顔写真が「ぼく」に応えるように目配せする。最後、「ぼく」はあくる朝、庭の竹の上に立ち、ビルの谷間の空へと舞い上がって水平飛行して行こうと待っている。このような幻想的な場面で物語が終わる。

3. 台湾の埋葬の習俗

「拾骨」を読んでまず発見があるのは、台湾の埋葬方法であろう。埋葬に関する描写を挙げてみる⁹。

⁹ 以下、「拾骨」の引用は、引用者訳。引用中の「……」は引用者中略。

その夜、墓の土が四方に飛び散り、母さんがむくっと起き上がった。うつむき加減で陽の高い大通りを歩き、静かな顔は無表情で、黒からほとんど無色になった色の死装束を着ていた。ぼくの六、七歩後ろを歩き、ぼくが赤信号で止まるとあの人も止まった。(6節¹⁰)

「ぼく」が夢で見た母親の描写で幻想的な情景では、母親は土を押しよけて墓の中から起き上がり、「ぼく」の後について街の通りを歩く。「母さん」は土葬されて墓に遺体があるのである。

「ぼく」は久しぶりに夢に見た母親のことが気がかりなこと、母親が泥だらけだと言うおじの意見や、墓地にある人体を見るのは「長患いや嫌な気を全て消し去る」という夢判断の縁起の良い結果にも後押しされていることを切り出して、兄に母親の遺骨を墓の中から取り出して改葬する「拾骨」¹¹の相談を持ち掛ける。また、二人は、母親が長年経っても墓の中で白骨化せずにそのままではいるのではないかという、不朽体（腐敗しないと言われる聖人の遺体）の可能性をも思い巡らす。

棺は地に置かれると鉄のきりで前後に風を通す穴が開けられた。——母さんの足の裏まで穴を開けられやしないかと冷や冷やした。今母さんに不朽体になってもらいたくても難しい。母さんはどこへ行ったらいいのかわからずに蠢いている虫に体の肉を返してもらわないといけない。(19節)

だが「ぼく」は、土葬したときの様子を思い出しながら、やはり母の遺体は通常通り腐敗が進んでおり、不朽体の可能性がないことを確信している。

拾骨は一回九千だ。拾骨師は市内でも有名な土公仔獅^{トコゴンザイシー}の血筋の職人で、手作業は丁寧だが費用が高く、彼のタイムスケジュールにも合わせなければならなかった。三太^{サンタイ}のBBCALL¹²で、特約している風水師が来ていた。その場で赤い紙に故人の姓名と生年月日を書き、土を掘るのに縁起の良いのはいつかを占った。(12節)

「ぼく」は兄と土葬済みの母親の「拾骨」を進める話をつけると、骨壺選び、納骨堂の下見、「拾骨」の吉日の風水占い、「拾骨」職人のスケジュール確認などに奔走する。

¹⁰ テキストは、節に1から30まで番号がある。引用箇所はその節番号を示す。

¹¹ 拾骨は、日本語では、火葬場で遺体を火葬後、遺骨を箸で親族らが骨壺に収める意である。改葬の意である中国語の「拾骨 shigu」を区別するため、本稿では鍵括弧を付けて用いる。

¹² 訳注：ポケットベル呼び出し。

九時半、職人はまず土地を拝み土地公の金を燃やすように言った。(24 節)

「それは頭蓋骨じゃないか！」^{アルガー}二哥が驚いて叫んだ。
ぼくたちは寄って土の枠の上にしゃがんで見た。助手がすぐに職人に黒い傘を手渡した。拾骨獅はカラス傘を持つと、傘を左右に揺らしながら唱えた。^{ティエンホアンホアン}天 皇 皇、^{リーホアンホアン}日 皇 皇¹³。カラス傘はあなたがまた陽の光を見ても目が眩まないようにあなたを守る。刷毛で細かい砂を払った。——完全に^{ドクロ}髑髏の映画で見たような骸骨の頭だった。(25 節)

「誰か両側とも十二本ずつあるか数えてくれ、」そしてまた言った、「数えなくていい間違いはないだろう、」カラカラと麻袋に入っていった。(25 節)

母さんは今^{シーチー}獅記の秘密の焼窯にいる。ベントを降りると、拾骨獅は麻袋を提げてスクーターに乗り、彼の秘密の焼窯に向かった。町の話では彼の焼窯は好きな大きさの形、色に焼き上げることができるそうだ。(29 節)

拾骨職人が黄土色をした硬いボール紙に包んだ箱を持ってきて、開けた。写真の母さんの顔が黒心円の地肌にはっきりと白く浮き出していた。職人はぼくたち兄弟に一人ずつ線香をあげるように言った。それと同時に叫んだ、「母さん！ 堂の席に入るよ！」ぼくは壺を持ち、車に乗り、母さんを腹と両足のところにしっかりと置いた。(29 節)

「拾骨」は、風水に基づく縁起の良い日時に、儀式として専門の「拾骨」職人が仕切って執り行われる。集まった親族で土地を拝み、「土地公」(土地神)が神の世界で使うための紙幣を燃やす。職人が墓を掘り、頭蓋骨が出ると、故人の目を守るため黒い傘で日光を遮り、呪文を唱える。職人たちが白骨化した遺骨の砂などを刷毛で払い、麻袋に集める作業をするが、「ぼく」や兄たちも麻袋を持つのを手伝ったり、骨を手にとったりする。最後に頭蓋骨を袋に入れ、まとめられた骨は職人の焼窯へと運ばれ、焼かれる。その日のうちに職人が遺骨を収めた骨壺を届け、「ぼく」たちは予め購入しておいた納骨堂の一角に壺を安置する。

こうした埋葬済みの遺骨の改葬は、おおよそ中国南部(主に福建)、台湾、日本の南西諸島(沖縄)、韓国などで見られる習俗で、地域によっては今日でも行われている。発祥の理由には様々なものがあるが、霊魂は肉体でなく頭蓋骨に依るため、骨を改めて埋葬する必要があるという霊魂観による理由、および、先祖の骨を後に死んだ者と合わせて埋葬するため、自ずと掘り返して埋葬し直す必要が生じるという合同葬の理由が主要である¹⁴。また、風水思想によるものもある。定型化・習慣化したものは一定年限に実施し、決まった作法などが

¹³ 訳注：拾骨儀式で唱える呪文。

¹⁴ 蔡文高「第一章 中国洗骨改葬の史的発端」(『洗骨改葬の比較民俗学的研究』岩田書院、2004) 参照。

ある。風水の理由によるものは年限に関係なく行われ、作法もあまり定めがない。風水の場合は骨の色によって状況の良し悪しを判断し、同じ場所に再度埋葬したり場所を移したりすることもあるという¹⁵。

「ぼく」は久しぶりに夢枕に立った母親のことを気に向け、夢判断を「拾骨」の決断の根拠としていることから、舞鶴の「拾骨」は、故人の憂いや、故人を案ずる親族の思いを浄化しようとする、風水思想による改葬と言える。だが、頭蓋骨が出たときに黒い傘を差すことや骨を集めた後に焼いて清めている（洗骨する）ことは、一定の作法に則っており、部分的に儀礼的な要素があることも窺える。洗骨は骨を清める行為で、地域によって水、酒、火を用いて行われる。

台湾では元来土葬が主流であった。高齢化が進んだことと土地の制約により埋葬事情が変化し、2000年代半ばから急速に火葬へと転換し、2014年時点では火葬が9割以上を占め、葬儀産業が規模拡大している¹⁶。1993年の作である「拾骨」は、今日では稀有となりつつある台南の習俗を描いていることで、まず興味深いものである。そして、土中に埋められた棺を掘り返して親の白骨化した遺骨を素手で拾い上げるという、厳粛で独特な体験も感じ取ることができるものであるだろう。

4. 「ぼく」の外界への再出発

「拾骨」の物語には、もう一つ、「拾骨」を原動力としてひきこもりから脱してゆく、「ぼく」の再出発の過程も読み取ることができる。それは結果的に亡母を改葬する以上に、「ぼく」にとって意味があるように思われる。

「ぼく」がベッドから起き上がれないほど軟弱であった最初の場面と、「拾骨」の計画を始動させ、勢いよくその段取りに奔走する描写を挙げる。

何年ものひどい妄想性障害の後、ぼくはベッドの上でほとんど不随だった。起きて歩くときも猫背、足の裏は床にへばりついて踵^{かかと}が持ち上がらなかった。妻は抗不安薬を飲んでいるせいだと言ったが、昼も夜もベッドで伸びていて、必要なときにも人前に出られず、踵が上がらないなんてものじゃなかった。(1節)

ぼくは水^{シュエイシエン}仙後宮まで息せき切って自転車をこいで、六舅^{リウジウ}一家が祀っている太子爺^{タイズイエ}¹⁸を訪ねた。(8節)

¹⁵ 蔡文高「第二章 現代南部中国の洗骨改葬」(前掲)参照。

160-168頁

¹⁶ 目方芽輝「発展期に入る台湾葬儀産業(上・下)」(野村総合研究所台北支店編集『台湾投資通信』227, 228号、中華民国經濟部投資産業処、2014年7, 8月)

¹⁷ 訳注:母方の六番目のおじ。

¹⁸ 訳注:古代の皇太子の尊称。

ぼくという足の速い馬が彼のところに着くと、彼はいつでもそこを離れたところだった。(11 節)

^{サンタイ}三太が言った。「この悲しくて辛いお商売はにっこり笑って馬鹿なふりをしませんと。」ぼくは顔を整えて答えた。「慣れることですよ——普段はぼくも同じです。」(12 節)

そして、すっぴんの顔を傾けながらぼくを褒めた。「こんなとてつもない移転プロジェクトを案外自分で進める力があつたのね。」(中略) 全部母さんがぼくにこのプロジェクトを任せてくれたことに感謝しなくちゃ、でなけりゃぼくは絶対痔になるまでベッドでごろごろ本を読んでたよ、とぼくは言った。^{アオズ}奥子は三十分毎に跳ね起きて三分間回れと教えている。(15 節)

こうして勢いを得てゆく「ぼく」は、さらに未来の子供のことや食生活、健康、心掛けるべき精神状態などにも考えが及ぶようになる。後半部分の描写を挙げる。

(中略) 妻が節約したその金は、ぼくたちの将来の赤ん坊の粉ミルク代、四歳に始める課外教育費のためのものだ。(15 節)

ぼくは現世の恩義や恨みをほとんど忘れている。まして生前のことなんて覚えていない。(16 節)

^{アオズ}奥子も元気よく跳びはねることこそ生活の秘訣だと言っている。徹底的に跳びはねれば、自然と不眠じゃいられなくなる。(18 節)

^{アオズ}奥子は人の不幸を望んではいけないという。気持ちが不安定なときは、ハミングに集中。(19 節)

ぼくはそのとき宣言した。今日の朝と昼は菜食、夕食は問わない、——尼僧の言いつけだ。六時きっかり、妻は寝ぼけ眼で、ぼくたちは出かけた。(22 節)

拾骨獅は下あごから一本の金歯を取った。「ごらんなさい、純金は悪くなってない、」いかにも嬉しそうに見せると、「記念に持って帰る価値がある、」だが誰も手を伸ばそうとしなかった。金歯がぼくの目の前に現れたとき、ぼくは反射的に腕を伸ばした——金歯が手のひらに落とされ、指がしっかりと握った。(25 節)

「ぼく」の気持ちは「拾骨」で母親の骨に触れて高揚し、母の肉体に焦がれて、かき氷を

食べる女子学生の肉体観察に恍惚とするが、その直後、突然肉体を失って骨となった母が現実となって迫り、ひどく落ち込む。そして、娼婦を買ってその下半身に懐かしき母胎を見出す。

ぼくは少女の顔をじっと見た。ゆっくりとその顔のふくよかな内側に入り込み、母さんの骨を見る。ぼくは懐かしく母さんの骨を感じた。あんなふうに滑らかでふくよかな肉を欲している。ぼくは母さんの骨と化し、夢中で少女を見つめた。(27 節)

この転居プロジェクト計画には取り返しのつかないミスがあった、——母さんの血と肉はついさっき遺棄したあの墓穴に留まっている。墓園のすべての草木の枝葉には母さんの血と肉の養分が溶け込んでいる。不安になって踵^{きびす}を返そうとすると、「パーッ」と鳴る音に驚かされ、一台のタクシーがゆっくりと目の前で停まった。(27 節)

ぼくは女の草の茂みの陰毛の間に隠れ、こっそりと母さんの金歯を口に含んだ。太腿の内側の奥に埋もれながらちぎって嚙んだ。(中略) ぼくが臍の穴から中に入ると言うと、女は入れるならどうぞと言った。(28 節)

娼婦の下半身で子宮回帰の幻想に没頭した後、最後、納骨堂に赴いた「ぼく」は、葬儀業者の三太^{サンタイ}がボディラインが強調される服を着ているのを目にしても、「その服の上に胸の谷間が乗っかっているかには注意がいかなかった」(29 節)。もう以前のように女性肉体には興味を引かれなくなっている。

それと同時に叫んだ、「母さん！ 堂の席に入るよ！」ぼくは壺を持ち、車に乗り、母さんを腹と両足のところにしっかりと置いた。(中略) ぼくは合掌した。「母さん、——それじゃあ。」一瞬母さんはぼくに向かって瞬きした。(29 節)

すると刺竹の先の上に片足で立っていることに気が付いた。ぼくはズボンのポケットの奥にあるヒョウタン袋をさぐった。ぼくたちは待っている——奥子^{アオズ}がニンニクの皮を剥いたら、すぐさま天空とビルの谷間へ舞い上がり、一緒にどうでもよい遠い彼方へ水平飛行するのを。(30 節)

晴れ晴れと母親に告別し、あくる朝、「ぼく」は鳥の声で目を覚まし、庭に出て歩き回り、気が付くと竹の上に立ち、飛び立とうとするところで、物語は終わる。

最初、「起きて歩くときも猫背、足の裏は床にへばりついて踵^{かかと}が持ち上がらなかった」「ぼく」は、奥子^{アオズ}の助言を頼りに「拾骨」の計画を進めるにつれ、自転車を猛然とこぎ、食生活や心理状態に気を遣い、拾い出した骨を手にとりしっかりと握るまでに至る。足腰が軟弱だった

はずが、途中、妻とも性生活を支障なく営み、最後は娼婦の下半身に没頭して母親の胎内の記憶を追体験する。そして、その後には女性の肉体への執着が消失している。亡母を改葬し終えることで、「ぼく」も長患いを断ち切り、自らの足で立って飛び立とうとする新たな境地に達している物語が読み取れるように思う。

5. 舞鶴の異界

「拾骨」体験と「ぼく」の再出発に並んで、舞鶴の描く不条理で滑稽な異界の体験もこの小説を支えるものである。主には、「ぼく」の母親の亡霊との交流、荒唐無稽な生きものの登場、地獄と天国巡りがあり、また、「ぼく」は寺の亀と向き合って「亀術」を習得したり（13, 17 節）、療養所の入院仲間が陰干ししたゴキブリを使ってベッドの隙間で繰り広げる「兩岸攻防戦」のことを思い巡らしたりする（17 節）。一貫しているのは、「ぼく」はスピリチュアル系のシリーズ本で読んだ「精神の旅行家・奥子」に感化され、昼も夜も「奥子と世界旅行から宇宙へとまっしぐら」となっていることで、「ぼく」は奥子^{アオズ}をある種の師匠に、「拾骨」の計画を立て始める。

以下、いくつか主だった異界の描写を挙げてみると、母親の死んだ直後の日の回想の場面では、まだ家に遺体があり、親類が悲しみにくれて遺体を囲んでいる。その中、「ぼく」は母親が目を開けるのに気が付いてアイコンタクトをとり、死んでいるはずの母親がさらに体を起こして言葉を発する（2 節）。どこまで現実でどこから幻想なのかわからない場面である。

また、「ぼく」は奥子^{アオズ}の本を読んで以来、常に奥子^{アオズ}と旅しているらしく、ふとした折に巡って来た場所を思い返す。荒唐無稽で幻想的な生きものと対話することもあれば、亡母の霊と街歩きをすること、天国と地獄を巡ることもある。

ぼくはついさっき名前も知らない場所を旅したところだった。軽業のカンフーができる大きな鳥が尻を突き出し、母鳥の突き出した尻のてっぺんにある茶碗の上に立っていたのを、この目で見た。ぼくは、暇なときうちの裏庭の刺竹の先っぽに立ってみてくれないか、とその鳥を招待した。（6 節）

その夜、墓の土が四方に飛び散り、母さんがむくっと起き上がった。うつむき加減で陽の高い大通りを歩き、静かな顔は無表情で、黒からほとんど無色になった色の死装束を着ていた。ぼくの六、七歩後ろを歩き、ぼくが赤信号で止まるとあの人も止まった。（中略）天後宮を過ぎ、夕闇の色が黒い石の通りに浮かび、武廟口を出た。マクドナルドかケンタッキーのガラス張りの店の前に立って、黙ってぼくが飲み食いするのをじっと見ていた。（中略）ぼくは駆け出し、さっと家の中に入り、部屋まで入って、ドアに鍵をかけた。ベッドに倒れ込むと同時にドアをロックする音が聞こえた。コンコンコンまたコン……（6 節）

その夜、ぼくは XO 台湾のペットボトルを腰にぶら下げて、地獄の裏口に身を隠した。見ると彼らが永遠に中庭で地牛¹⁹の腹くらい大きい鍋を作りながらあなたを待っていて、その中では千百万億の人がぎゅうぎゅうでも文句も言わずグラグラ煮立てられている。(20 節)

ぼくは売店で最新号の旅行誌を買った。特集、失われた天国の島。人という万物の霊とやらは遠きも近きもどこへでも行く。行ったのは書架の下の大小さまざな形のプールだ。天国はゆっくりとプールの中へと消える。(中略)十九年間、母さんの家は紅毛^{ホンマオ}埤の下^{バージョン}の八掌溪河床だ。母さんが浮かんで、八掌溪^{バージョン}沿いに下って行って、河口に出られたら、ぼくたちはすぐにエーゲの天国のプールで落ち合える。(23 節)

「ぼく」は亡母の気を常に感じているが、その描写は怪奇現象的なものではない。死んだ直後に起き上がる亡母はゾンビのような異形の身体ではなく、また、「ぼく」の後ろについて台南の通りの信号を渡ったりファストフード店に立ち寄ったりするなど、亡霊にしてはスケールの小さい、のどかな振る舞いをしている。亡霊が「コンコンコンまたコン……」(原文：叩叩叩又叩……)と玄関をノックする描写は、控えめながらユーモラスであろう。

一方、「ぼく」が「地獄の裏口」から千百万億もの人々が火鍋でグラグラ煮立てられている光景を目にして、母親の姿がありはしないかと案ずる場面、エーゲの天国のプールで亡母と再会することを夢想する場面は、怪奇現象を飛び越えて、伝説やお伽噺の中のような情景になっている。亡母への思慕が感じられつつも、やはり滑稽な場面である。

朝、声のでかい鳥に起こされた。「クリカボチャジュースは希少ジュース」、「クリカボチャジュースは希少ジュース」、おおよそ鳥が新開発した一種のジュースで、朝っぱらからあちこちで人に知らせているのだろう。鳥の大声を聞き、起きて裏庭を一万二千歩歩いた。口で「クリカボチャジュースクリカボチャジュース」とぶつぶつ言った。何も言えなくなりそのクリカボチャジュースと溶け合っ一つになるまで。すると刺竹の先の上に足で立っていることに気が付いた。(30 節)

軽業のカンフーができる鳥と対話する情景のほか、最後の鳥の大きな売り声「クリカボチャジュースは希少ジュース」(原文：金瓜汁是珍品果汁)が聞こえる場面は、最も不条理で滑稽である。鳥の鳴き声にきっかけと勢いを得て踏み出そうとする「ぼく」の姿が、「クリカボチャジュース」という奇妙な語呂の良さとおかしみとともに、脱力したように描かれている。

こうした不条理で滑稽な情景や生きもの、亡霊の登場は、一面には、「何年ものひどい妄

¹⁹ 訳注：中国の伝説上の牛のような声をした動物。

想性障害」を患っていたという「ぼく」の不安定で妄想的な世界観を表しているものと言える。同時にもう一面には、母の遺体と向き合うという厳粛な現実や「ぼく」の痛切な感情をどこか高みから見下ろしたり際立たせたりする、舞鶴の冷めた視線、力みのないユーモアが感じられよう。

おわりに

本能的な性表現や、子宮・原郷回帰願望の表象を一瞥して、細部へも目をやると、「拾骨」の読みはさらに広がる。主人公「ぼく」は、台湾の伝統的な洗骨改葬を経て亡母の遺体と向き合うとともに、亡母の憂いから解き放たれることも目指している。縁起のよい方位や配置を占って運気をよくしようとする風水の思想に後押しされながら、舞鶴と「ぼく」は母の死後の安寧を願う。読者は、ひきこもりだった「ぼく」にいつしか巻き込まれながら、ともに亡母の拾骨の段取りと費用を思案し、墓を開け、頭蓋骨を手取るまでに至る。その間、不条理で滑稽な異界巡りと台南の街歩きに導かれ、「ぼく」が外界へ再出発するまでの伴走者となる。

親族一同墓から拾い出した遺骨を改めて納骨堂に収め、「母さん、——それじゃあ」と、最後に「ぼく」が合掌して亡母に語りかけ、骨壺の亡母の顔写真が瞬きしてそれに応える場面は、改葬の全工程が達成され、晴れ晴れとしている。「ぼく」はもはや飛び立つ準備ができています。改葬の伝統習俗と他界した肉親へのリスペクト、ひいては娼婦の生々しい乳房と下半身を懐かしき母胎に見立てるほどの、「ぼく」の亡母への過度な思慕の物語は、痛切に読者に迫る。それと同時に、舞鶴独特の力みのない不条理とユーモアの世界観によって味わいを増す、「ぼく」の再出発の物語も、読者にいっそうひだと奥行きのある「ぼく」の繊細な人生を感じさせるものではないだろうか。